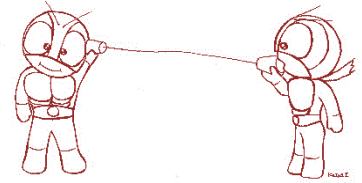




コロナ禍に思う



2年前の今ごろは、学校は**3か月に及ぶ臨時休業中**でした。南アルプス市内ではどの小中学校も、卒業式を卒業生と教職員のみで行いました。**マスクや消毒液の不足**もありました。5月の終わりに、学校が再開するとき、マスクが手に入らないという子どもがいたらどうするか、などと話をした覚えがあります。

現在、報道では、その日の感染者数が何人だったとか、医療がひっ迫しているなど、様々なことが報道されています。子どもたちをお預かりし、教職員を管理する立場からすると、**不安になる報道ばかり**です。そんな報道の多い中で、こんな報道もありました。

長崎大学大学院・森内浩幸教授は「オミクロン株は、子どもがかかりやすいと、間違った認識をもたないことが大事。」と話していました。何万人も感染するのであれば、当然、子どもも感染するのですが、その子どもの感染が強調されてしまっているとのことでした。また、森内先生は「**一番安全な場所は学校。**」と言い切りました。「換気をし、距離をとり、手洗いをし…こうしたルールを一番守っているのは学校。休校にする方がむしろ危険。」という話もありました。「高学年になればなるほど、元気な子どもは家でじっとしてられず、より一層、感染リスクの高いところに行ってしまうことにつながる。子どもたちがそれを家庭や学校に持って行って、そこでクラスターが起こるといふ図式の方が多い。」と話していました。 【新・情報7daysニュースキャスター】(TBS 1/29)

本ホームページ【学校のひろば】→【日々のようす】ではときどき紹介していますが、**本校の子どもたちは「感染症対策」をよく守って生活しています。**感染リスクの高い給食中は、誰もしゃべっていません。校舎内が「シーン」としています。子どもたちが「前を向いて」「間隔を空けて」「黙って」食べている様子は、よく我慢をし、^{けなげ}健気で涙が出てきそうになります。6年生を送る会の思い出のスライドには6年生が低学年のころの給食の様子が映し出されました。机を寄せ合って楽しそうに食べている様子でした。こういう給食の楽しさを1・2年生は知らないのです。コロナ禍に入学したので、給食を「前を向いて」「間隔を空けて」「黙って」食べる給食しか経験していません。現在、県から出されている要請には、下校のとき、どこにも寄らずに帰るように指導することが含まれています。学校の帰り道って、みんなでワイワイと道草をしながら帰ることが楽しい時間でもあるはずですが、休みの日に友だちと集まって遊ぶことなどは、最高の楽しい時間だと思えますが、それも自粛が望まれています。

何かを我慢しなければいけないとき、辛かったり苦しかったりするときに、それが**期間限定であれば**、耐えられます。しかし、終わりが見えず、まだまだ続くとなれば、耐えることが難しくなるのは、人は皆同じです。目標の実現に可能性が見えてきた、今は厳しい段階だけれども先には楽しいことが待っているという状況ならば、我慢して乗り切ることができます。そして、そういう状況でも楽しいことになる場合すらあります。

ところが、コロナ禍の収束→終息が見通せない現在、我慢の期間がすでに長く続き、**先が見えない**ことへの不安や不満、そして、ぶつけようのない憤りがたまっているのではないかと思います。そんな中でも、本校の子どもたちは文句も言わず「新しい生活様式」「感染症対策」をよく守って過ごしているのです。

保護者の皆様には、子どものカゼ症状や家族にカゼ症状の方がいることなどにより、早めに登校を控えてもらっています。これが本校の**水際対策として、とても有効にはたらいています。**また、折にふれ、教職員への**労をねぎらう言葉をいただき大変ありがたく思っています。**

☆本校には、**よく我慢を続けてがんばっている子どもたち**がいます。

☆**家庭・保護者に支えられている**ことを改めて感じる事ができています。

これは、コロナ禍にあって、数少ないプラスの感想です。

